

小論文問題

受験番号				
N	N	C	1	1
氏名				

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

がちゃん。ぱりん。

また今日も、コップを割ってしまった。きよろきよろして落ち着きのないわたしは、小さな頃から、袖にひっかけたり、取り落としたりして、とにかくガラスの食器を割りまくってきた。四つ下で、ダウン症の弟の方が、わたしよりよっぽど慎重だ。彼はまるでヒヨコでもすくうかのように、ずんぐりむっくりした手で大切に食器をあつかう。レストランへ行くと「姉ちゃん、あぶないで」と、彼がわたしの袖元からお冷のコップをそっとよけるのを見て、母はたまげていた。

そんな弟がガラスを割ってしまったところを、二度だけ見たことがある。二十五年目を迎える彼の人生で、たった二度だけ。母には言っていない。わたしと弟だけのひみつだ。

一度目は、弟が中学生のときだった。いつも学校が終わると、道草をぞんぶんに食いながらのりくらりと機嫌よさそうに帰ってくるはずの弟が、ちっとも帰ってこない。住んでいるマンションの玄関を出て、エレベーターに乗り、一階のエントランスへ様子を見に行くと、なんとそこに弟がいた。顔を真っ赤にして、両目に涙をため、口をきゅつと真横に結んでいる。弟に対峙しているのは、小学生くらいの男の子が二人、さらにマンションの管理人だ。そしてなにより驚いたのは、エントランスのガラス扉が、派手に割れていたことだ。

「なにごとですか」

ぎょつとして、わたしがたずねる。膠着状態の子どもたちに代わって、状況を説明してくれたのは管理人だった。「ガシャーンって大きな音がしたんで見に来たら、この子たちがいてね。事情を聞いたら、『岸田さんとお兄さんが突然、暴れて割った』って言うもんだから」

暴れて、割った。

一旦、落ち着いて想像してみたが、想像ができなかった。弟は、いつもと違うことが起きたり、泣きわめいたりしている人を見ると、たしかに状況が飲み込めず、パニックになることはある。だけど、人やものを傷つけるようなやつではない。彼にとっては、命があるものも、ないものも、すべてヒヨコなのだ。

「そうなの？」

弟にたずねる。弟は、ぼろつと大粒の涙を流して、ぎゅうつと唇を噛み、首を横に振った。男の子の一人は、サッカーボールを持っていた。ちょうどエントランスの前は、子どもたちがボール遊びをする広場になっている。

「本当にうちの弟が割ったの？」

男の子たちは顔を見合わせて、気まずそうにした。結局、わたしがエントランスにある監視カメラを見ましようと言うと、彼らはあわてはじめたので、管理人が察したのか「今回はいいですよ」と言い、その場は解散になった。弟の背中に手をあてると、ぶるぶると彼がふるえているのがわかった。怒りだろうか、悔しさだろうか。どちらもだ。家についてから、二人でわんわんと泣いた。感情も思いやりも、彼の中には立派に育っているのに、それを人に伝える言葉を持ちあわせていない。どれだけの無念だろうか。

（中略）

弟は、わたしには想像もつかない景色を見て、到底信じられないものに愛を注いでいる。それが伝わらない世界に、何度、絶望したことだろう。ガラスを割ったとき、いつも彼はめそめそと泣いていた。それでも弟は、ガラスを注意深く拾い集めたら、多少は軽くなった心で立ち直り、別の愛しいものを見つけて、機嫌よくたくましく、できるだけの幸せを探して生きている。まるでずっと前から、そう決まっていたかのように。（後略）

ガラスのこころ 岸田奈美 飛ぶ教室編集部 飛ぶ教室 光村図書

問題 著者の主張に対するあなたの考えを、身近な例をあげて八〇〇字以内で記述しなさい。